

陶器の里「益子」



益子焼販売店の様子



職人が成形作業(口クロ成形)している様子



手作業で取っ手を付けている様子



釉薬を塗っている(流し掛け)様子



益子焼伝統の登り窯

益子焼のふるさと「益子町」は栃木県の東部に位置している。益子焼は、江戸時代末期「笠間焼」で知られる笠間で陶器を作る技術を学んだ大塚啓三郎氏が、益子町内で良質の陶土



益子焼窯元共販センターのシンボル「大たぬき」

をみ付けて一八五三年窯を築いたことが始まりである。更に、釉薬の原料や登り窯作りに適した地形、燃料の赤松にも恵まれ発展していった。そして、水がめや火鉢、壺等主に日用品が、鬼怒川水系の河岸交通の発達もあり江戸の台所で使われるようになった。そして、台所用品がアルミ等金属に変わっていく明治末期まで、益子焼は順調に発展していった。

大正十三年、人間国宝である故・濱田庄司氏が益子に窯を築き、花器や茶器作るようになってから、日用品が中心であった益子焼の民芸品としての価値が高まり、今日に至っている。春と秋の陶器市が開催される日には、城内坂通りや共

販センターは個性あふれる益子焼の作家たちの作品や、各窯元の日用品を求める観光客で賑わっている。一九七九年には、通商産業省(現経済産業省)より「伝統的工芸品」に指定された。また、濱田庄司氏と親交のあった英国の陶芸家バーナード・リーチ氏等の普及活動もあり海外での人気も高い。二〇〇六年には「益子国際陶芸二〇〇六」が開催された。また、益子陶芸美術館では、今年度も七月から十月まで「英国、セントアイヴスの風」展が開かれ、英国の工房「リーチポタリー」で修行した日本人陶芸家の作品が展示された。

取材協力 つかもと製陶所
(栃木・佐藤和之)

恐山



大きな卒塔婆が並ぶ



強酸性の水をたたえる「宇曾利湖」

高野山、比叡山と並んで「日本三大霊山」と言われる恐山。開山されたのは、平安時代中期、円仁によるものだと伝えられている。円仁は、天台宗の開祖である最澄の弟子の一人で、唐へ留学中に見た霊夢により、ようやくこの恐山を発見したと伝えられている。地蔵信仰を背景とし、死者への供養の場として知られる恐山。長い歴史の中で



地獄を思わせるような風景

人々は、恐山を信仰の対象としてきた。火山岩に覆われた「地獄」と呼ばれる風景と、美しい宇曾利湖の「極楽浜」。恐山を訪れる人々はその景色に、死後の世界と故人に思いを馳せてきた。死者の言葉を語るイタコや、死後の世界に通じる風習や思想。これらが独特の雰囲気を生み出し、人々の心を引き付けるのかもしれない。下北半島国定公園にも指定されている恐山。美しい景色と温泉を味わいながら非日常を感じ、死後の世界に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

(青森・加福弥生)



宿坊「吉祥閣」



本堂へ続く回廊



堂々とたたずむ「山門」